

巢守三位と「紅梅」・「蜻蛉」の巻

須田哲夫

源氏物語の研究は、池田亀鑑博士の源氏物語古系図諸本の発見と御研究により、極めて複雑に又興味深く展開するに至った。

そしてこの古系図の記載する註記により、明らかに注目される事となったのが、現行の源氏物語に見られぬ、巢守三位なる女性を中心とする「古本巢守」巻の存在であり、これと現行源氏物語との関連である。

勿論、この「古本巢守」の存在については、早く鎌倉初期正治年間書写の高野山正智院蔵の白造紙に「ノチノ人ノツクリソヘタルモノドモ」の一つとして、「サクヒト」(クの下、ヲを欠脱か)、「サムシロ」と共に、その名を挙げられ、後人の作としてその存在は知られていたのであったが、更に堀部正二氏の風葉和歌集に存する現行源氏物語にない歌四首と南北朝頃の草子断簡の発見と御研究^{註1}により、その資料の示す内容を通し、「巢守」巻と推論されたが、その薫君と匂宮とに愛されるつもりなる女性を、宇治の中君と考えられた為、その巢守三位をめぐる物語を、宇治十帖の続篇とされ、巢守三位は遂に陽の目を見なかった。

しかし今古系図の発見により、それが明らかとなった。即ち池

田博士は、「源氏物語古系図の成立とその本文資料的価値について」^{註2}の御論文において、正嘉本、大島本、伝清水谷実秋筆本の三古系図の註記には、従来の系図に見られぬ巢守三位についての記述がある事を発表され、これら古系図は、「最古の伝本と思はれる九条家本ですら、鎌倉初期を下らず……中略……この九条家本が成立するまで、古系図の成立には幾多の段階があり、多くの写本が行はれていた事は、為氏本に属する正嘉本の奥書に、数十巻の伝本により校訂するとあるので分る。」と述べられ、同じ奥書によれば、それらの伝本の中には、「六条三品、定家、俊成女」などの所持本も存しており、その源流は後三条、白河朝を下らぬものと推定された。勿論この成立年代の推定は後三条、白河朝と定家・俊成女等との距離が少くも百四五十十年は存在している点、そこまで遡る事が出来るか疑問とすべきであるが、「系図はその時代に流行していた源氏の本文によって通読した読者が、可及的にもとの形を継承し、彼等の理解を通して整理したものである」事は確かであり、従って巢守三位をめぐる匂宮と薫君の恋を内容とする巻が、平安朝の末(後三条、白河朝とはいい切れぬ)には存在

していた事が確かである。

問題の所在

一、博士は、この古系図三本に見出された巢守三位についての註記の綜合による内容に、これと深い関連を持つものとして雲隱六帖「巢守」巻末の、宮の君やがて三位となる女性の話を見出されて、その同一性を指摘され、古系図の註記は雲隱六帖巢守巻より詳細故、前者は後者からの抄出とは考えられぬず、雲隱六帖の作者が拠った古本巢守の存在を想定された。しかし果して、この両者は同一系統の話として論じ得る程、同一性、関連性を持つているかということ。

二、又博士は紅梅巻に語られる宮の御方の話は、古系図の示す巢守三位の話の前半に全く一致する。しかし両者は総べて同一という訳ではなく、従って両者の共通源泉として、「原紅梅」が存し、その亡失後、現行紅梅巻がその初めの一部を、「古本巢守」がほぼ全部を復活させたものか、と考えられたが、親としての「原紅梅」||「古本巢守」は、果して現行紅梅巻を子といひ得る程、一致するだろうかということを、古系図自体、又現行源氏物語自体から考えたい。

そして右の一、二の項目は深い関係にあるのだが、これを綜合して考えてみると、「原紅梅」を親として、その面影を全く伝える「古本巢守」は、巢守三位をめぐる匂宮と薫君の恋を物語るが雲隱六帖「巢守」巻末の宮の君もその面影を伝え、紅梅巻の宮の御方も又その前半を伝えるという事になって、両者は、巢守三位の面影を伝える人物という事になるが、果してそう考えられるだ

ろうか。そしてこれらを含んだ、次元を異にする「原紅梅」をそこに考えてよいだろうかという事。そこで、これらの事を考えてゆく為、まず第一に古系図巢守三位と、雲隱六帖「巢守」巻末の宮の君（後に三位）とを比較し、ついで紅梅巻の宮の御方と、古系図巢守三位との関連を考察してゆきたいと思う。

一 古系図「巢守三位」と雲隱六帖、巢守巻の「三位」

(一) 正嘉本古系図

本系図は螢兵部卿宮の子として、侍従、孫王君、宮の御方を記した後、「以下四人流布本になし」と断つて、源三位、頭中將、巢守三位、中君を掲げ、源三位は父宮の御伝えにて琵琶の名手、頭中將は姉巢守三位に匂宮が通われた折の仲立ち人等身辺の記事を註し、巢守三位の項には

「一品宮にまいり給て、御琵琶の實に三位になり、兵部卿宮のかよひ給ければ、はなやかなる御心を、けざましく思て、かゝる大将のあさからずきこえけれ

雲隱六帖「巢守」巻、該当部分

「式部卿の姫君、大宮（註明石上）の御方に宮の君とておはしける。たうだいのみかど（註匂宮）、いまだ兵部卿にてあさからず思ひしめ給ふに、うちのおとど（註薫君）、大将のころをひ、いかでありつるわがこゝろおもひしらせてまつらんと、この宮の君をかたらひつき給ける。みこもいとをしき事とはおぼし給ひけれど、わが御ふるまひも、おもひしり給ふにや、ふかくもえんじ給はず。かくてこのはらに若君ひとりおはすをさ

ば、心うつしてけり。さて若君一人うむ。其後、みやあやになる心くせの、人めもあやしかりければ、朱雀院の四君のすみ給ふ大うちやまにかくれまい。みめうつくしくて、びわめでたくひきし人なり。」

(二) 大島本古系図

本系図では、螢兵部卿宮の子に、侍従、童孫王、紅梅姫君を挙げ、童孫王を「すもりの三位とも」と誤って註するが、この宮の直系に巢守三位なる人物が存在した事を示す。又同系図には、藤大納言の子女を、

藤大納言

源三位 すもりの三位の母

一品宮 宣旨なり

故師中納言北方 源三位上同腹

と記し、巢守三位の母方を示す。

(三) 伝清水谷実秋筆古系図

本系図には螢兵部卿宮の子に侍従、巢守三位、宮御方の三人しか見えず、巢守三位について

へ、おとふはふさはしからず、いとどしく御心ざしはなき事をたゞみこの御心をうごかひ奉らんと思ひ給ふばかりなり。しかたはぶれにくき事いで来ぬるをいとはしたなくおもひわたり給へる比しも、三の宮(匂宮)御くらゐにつき給けるせんじになるべき女房のおはせざりければこのたびぞ宮の君をば、心とゆづり給ひける。
いとねたしながら、せんじにて三位の君とぞ聞えし。」

「びはひきなり。てならひの巻にあり」

の註記がある。

以上対記したことを古系図三本を、巢守三位を中心に整理してみると「螢兵部宮の子、源三位は父宮の伝で、琴の名手で初めの北の方は藤大納言(正嘉本は藤中納言)の女で、頭中、巢守三位、中君を生み死した。その女巢守三位は美貌であり、琴の名手で一品宮に仕え、琵琶の賞に三位を賜った。巢守三位には初め兄頭中將の手引で匂宮が通ったが、宮の御性格の華やかなのを厭い、薰大將が浅からず想いをかけられたので、心を移し薰との間に若君を生んだ。しかしその後、匂宮の例のあやになく心癖に悩まされ遂に朱雀院の四の君の御住みになる大内山に隠れて参った」という事になる。

註 巢守三位の父に関しては、正嘉本、伝清水谷実秋筆の両古

系図では、螢兵部卿宮を父とし、大島本では、螢兵部卿宮の子の源三位を父とし、螢兵部卿宮からいへば孫となっていると、池田博士は発表され、大島本を採用されたが、今これによって論を進める。しかし、その母を藤大(中)納言の女とする点では、ほぼ一致する事は注意してよく、前者の古系図作者の誤りなのであろう。

これに対し、雲隠六帖「すもり」巻の「三位」の話はどうか。まずこの三位が、この巻において「式部卿の女」と呼ばれている事、即ち蜻蛉巻にて「宮の君」と呼ばれる蜻蛉式部卿宮の姫君であるという事は注意すべきである。

さて話の筋は「この蜻蛉式部卿宮の姫君は明石中宮の御方に（実はその一品宮の侍女として）宮の君といってお仕えしていた。そして当代の帝（匂宮）が、まだ兵部卿でいらつしやつた折、浅からず思ひしめられたが、当時大将であつた薫は、いつも恋人を奪われている自分の辛い心を思ひ知らせ申し上げようと、宮の君に想いをかけ、自分のものとしてしまふ。匂宮は心苦しく思われたが、御自分のふだんの薫君へのなさり方を御承知なのか、それ程にもお怨みにならない。こうして薫君との間に若君一人が生れる、しかしもともと愛はなく、ただ匂宮の心を悩ませるためにした薫は、こうした事の深まりを、ふさわしくない困つた事に思つてゐた。そこへ匂宮が御位につき、宣旨になるべき女房がなかつたから、薫は進んで宮の君を御譲りになった。宮の君は宣旨となり三位の君と呼ばれた」というのである。

そこでこの両者を比較してみると、確かに雲隠六帖「すもり」巻末には、三位なる人物が登場し、初めは匂宮に愛されるが、やがて薫に従ひ、若君を生むという点で、古系図「巢守三位」と似ている。しかしこれを検討すると、この前者に登場する「三位」なる女性とは、前記の様に蜻蛉式部卿宮を父とし、古系図巢守三位の父（螢兵部卿宮）とは同一ではない。そして巢守三位は薫の實意に動かされ、薫も愛していたのであるが、宮の君の場合は薫が今迄の恋の報復のためのもので、愛はない。従つて巢守三位が、匂宮の例の執拗なあやにくな御心を避け、大内山に入るに對し、宮の君は再び薫から匂宮に返され、帰って行く点、又古系図自身それぞれ別人として別々の註記がなされている点、両者は別人で

あろう。即ちこの二人の女性とは、その他の点も加へ、

一、それぞれ出生、つまり父を異にし、二、巢守三位に對しては、薫は実意があつたが、雲隠六帖「すもり」巻の三位には、薫の実意はなく、前者が、匂宮を避けたのに對し、後者は帰つて行く。三、古系図自身、両者をはっきりと別人として區別している。四、作中人物として、三位の位を頂く女房が一人しか登場しないという事は言い得ないこと。五、宮の君には古系図自体に巢守三位のように、琵琶の名手であるというような特技事項は記されず持たなかつたようである事。（これはこの宮の君と三位が蜻蛉式部卿宮の姫である事からすれば、当然である。蜻蛉巻にもその記事はなく、従つて雲隠六帖にもない）

かくみて来ると、これらの条件から、特に一二三の項目はこの両者の話の根本的相違を提示しており、その結果この両話は主人公を異にする全く別の物語で、同一源泉を元とした二つの物語とするには余りにもその差異が根本的だといわなくてはならない。そしてこうした誤りを誘う原因のものは、第一に古系図の人物が巢守三位と呼ばれ、雲隠六帖の三位が巢守巻に登場したためであり、第二に両者は、実意のあるなしは別として（ここが両者の問題点であるが）、まず匂宮に愛された女性で、後に薫君に従ひ、若君を生むというで似ているというこの二点の爲と考えられるのであるが、以上考へ来つた如く、この両者は全く別個の女主人公を持つ、別個の話である事が明瞭となつた。

では巢守三位はさて置いて、雲隠六帖巢守巻の三位は宮の君の話は、現行源氏物語中いづれに關連を求めらるべき物語内容であ

るか。

それは当然考えられるように、蜻蛉巻である。蜻蛉巻末には、句宮が明石中宮（大宮）の御女、幼い女一宮に仕える美しい蜻蛉式部卿宮の姫君一宮の君を聞き出し、浮舟入れ事件の後であり、その淋しさから「この君ばかりや、恋しき人（浮舟）に思ひよそへつべき様したらむ。父親王は兄弟ぞかし、など例の御心は人を恋ひ給ふにつけても、人ゆかしき御癖やまでいつしかと御心」をかけ、言ひ寄る。

一方薫もこの姫君の宮仕えを聞き、「もどかしきまでもあるわさかな。昨日今日といふばかり、春宮にやなど思し、われ（薫）にもけしきばませ給ひきかし。かくはかなき世の衰へを見るには水の底に身を沈めても、もどかしからぬわざにこそ、など思ひつつ、人よりは心寄せ聞え給」うたというのである。

そして句宮の為、先きに宇治の中君を失い、浮舟を奪われた薫の心に去来して離れないのが次のような心理であった。薫はこの今迄の恋の報復として、

いかでこのわたりにも、めづらしからむ人の、例の心入れて騒ぎ給はむを、語らひ取りて、わが思ひしやうに、やすからずとだにも、思はせ奉らむ。

即ち薫は「何んとかして、句宮が例の様に熱を入れてお騒ぎになつていらつしやる女を、この中宮のあたりの女房でもよいから手に入れて、かつて自分が味わたた様に、くやしいとだけでも思わせ申上げたいと思った」というのである。そして薫は「宇治の大君も中君も親王家の姫であるが、この宮の君も又、そうだつ

たなあ」と大君を懐しむという所で、この蜻蛉巻は終っている。

そこで、これを雲隠六帖巢守巻の宮の君に関する内容と比較してみるとよい。両者は恋の仕返しをしたいというひそかな願いを薫が持っている点までは全く同一である。しかし現行源氏にはそれ以後の事情が語られていないのに対し、雲隠六帖巢守巻では、それが語られている訳で、「かうして最初句宮にひかれ、その愛を受け入れた宮の君も、薫の生来の誠実さを信じ、これに従い、若君までもうける事となるのであるが、薫はもとと愛していた訳ではないから、この深入りをかえって厭い、句宮が帝位につかまい、宣旨になる適当な人がいないと、再び彼女を句宮に譲ってしまひ、彼女は三位と呼ばれて宮仕えする。」と、その進展を明らかにされる。いわば、雲隠六帖巢守巻の話は、現行源氏の蜻蛉巻における宮の君をめぐる薫の心理とその結末からする、当然考えられる完結的性質を持っている訳で、この両者の関係を知る時、我々は一層この雲隠六帖巢守巻の話を、古糸図の示す巢守三位の話と関連あるものと見る事が不可能である事を知るのである。

二 巢守三位と紅梅巻宮の御方との関連

ここで次に究明しなければならぬ事は、巢守三位の話と、紅梅巻の紅梅大納言の継女一宮の御方の話との比較である。

池田博士は、紅梅巻には句宮が弟の侍従を手引きにして、姉宮の御方に接近する。宮の御方は螢兵部卿宮の遺児で、美貌且琵琶の名手であったという話の骨格があり、「これは古本巢守巻の話の前半に全く一致する」とされ、しかし現行紅梅巻と古本巢守巻

は勿論異なるものであるから、その共通源泉として、「原紅梅」巻を推定され、これが亡失した後、現行紅梅巻はその「原紅梅」の始め一部を、「古本巢守」はそのほぼ全体を復活させたのではないかと推定された。しかし、一旦亡失した巻の一部が復活するという事の可否は別として、まず一致するという両者の部分を再比較し、その検討の上に立って論を進めるといふ事が必要であらう。

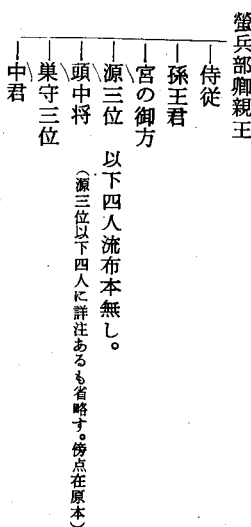
まず、紅梅巻「宮の御方」から見て行こう。即ち蜷黒大将の女真木柱は蜷兵部卿宮に嫁し、宮との間に一女をもうける。そして宮の没後、紅梅大納言に嫁す。その折連れて行った女は「宮の御方」と呼ばれ、琵琶が巧みであったと述べ、大納言は先妻の大君を春宮に差し上げ、その中君を匂宮にと思っているのに、匂宮はこの真木柱の連れ子の宮の御方をと望み、弟の大夫を通じ、歌をおくるが、「はかなき御返りなどもなき」有様であった。というのもこの宮の御方が内に籠った御性格であったからであり、一方母真木柱もこの匂宮の御志を知りつつも、浮気な宮の事だけに、躊躇するという所で筆を擱いている。

これを前に述べた「巢守三位」の話と比較すると、この紅梅巻「宮の御方」の話は、確かに次の二点で「巢守三位」の話と似ている。即ちそれは、(一)この二人が蜷兵部卿宮家系の子女であり、(二)琵琶の名手であるという点においてである。

そこで、この二つの点からするこの二人の女性の一致論の可否について考えてみると、まず第二の点については、稻賀敏二氏が既に述べておられるように、この蜷兵部卿宮一家は代々琵琶の名

手を出だす琵琶の名門であったようである。その点巢守三位はその琵琶の名門物語の一環を担うものとみる事が出来よう。即ち蜷兵部卿宮自身は勿論、その子侍従は梅枝巻に出て来る父宮の琵琶の直系であり、宮の御方はその妹に当る。そして巢守三位はこの侍従の兄弟の琵琶の名手源三位の子であり、蜷兵部卿宮からいえば孫(大島本に拠る。正嘉本は子)に当る訳である。こういったこの一家の性格からいって、この第二の点から、「原紅梅」古本巢守巻で、そして巢守三位を、この現行紅梅巻「宮の御方」の原型とする確証とはなし得ず、むしろ古系図も示しているように、別々の人物で、祖父、父(とその兄弟)、孫という三代中の人物をそれぞれ語ったものとみる方が妥当と考えるべきであらう。そしてこれは、第一の点の究明によって決定的となる。

まず、この二人は蜷兵部卿宮家系の子女ではある。しかし大島本古系図は巢守三位を、蜷兵部卿宮の子の源三位の子即ち孫として記して、子である宮の御方とははっきり区別しているという。今これを仮に無視するとして、正嘉本古系図の記載形式を検討すると、



という風に記し、源三位以下四人は一グループとして、現行源氏物語に見られる人々三人とは別に記されている事は注目すべきで、やはり宮の御方の話とは別に、これらのグループの人々の登場、活躍する一巻、それが所謂「巢守」巻（原紅梅などではなく、紅梅巻とは直接の関係のない）であったと考えた方が穩当ではなからうか。そしてこの巢守三位が宮の孫と古系図にある所から、宮の御方という子の世代を語る宇治十帖の統篇的性格も見出される。

以上のような諸点から博士が全く一致するといわれる前半の内容は両者を同一源泉から来るものとする確証とはなりがたい。

かく考えて来ると、紅梅巻の宮の御方と、巢守三位とは別人と考えられて来るが、特に古系図において、この二人の女性の母を前者は、「母まきはしらの上ひげくろの女」とあり、後者は、「藤中納言女（正嘉本に拠る。大島本は藤大納言）」とあり、「原紅梅」を源として、古本巢守巻がその全部を復活し、現行紅梅巻がその一部を復活させたというには余りにも判然とした区別である。

更に肝心の二人の前半部の行動も、家系を同じくし、琵琶に秀いでいる外は、巢守三位は一品宮に仕え、琵琶の賞で三位を賜わり、初め弟の頭中将の手引きで匂宮が通い、後薫の実意に動かされてこれに従い、若君を生むのであるが、一方宮の御方は、匂宮の情熱にもさそわれぬ内気さもあり、全く一致する」とされる話の前半の骨格において、実にはっきりした相違が見出される事は注意すべきで、この事実は他の前述の諸条件と相俟って、この二人はむしろ琵琶の家蜚兵部卿家の伝統を継ぐ別個の女性と考え

るべきで、その結果、この両者の一致という点から立論された、博士の「原紅梅」巻存在の推定は考えられなくなる。そして博士はこの古本巢守と紅梅巻との部分的的一致という点から、これら二つの源たる「原紅梅」を推定されたが、紅梅巻自体、博士もいわれるように後に宿木巻という証巻（後述）があり、式部の手になる事を認めておられる以上、作者が紅梅巻を執筆するに当り、亡失した自作の「原紅梅」の部分的復活しか出来なかったとする事は論理に矛盾が生じて来るのみならず、始め「原紅梅」が存在した後これが亡失して「古本巢守」巻が全面的に復活し、又これの一部を紅梅巻が復活したとなると、この間かなりの年月を見なければならぬのではなからうか。式部の没年は岡一男博士の御研究によれば、長和三年（西一〇一四）初頭（二年の晩冬より）と考えられ、更級日記の作者が物心ついて、父の任地で母や姉の語る「光源氏の物語」に耳を傾けたのが寛仁元年（西一〇一七、十才）叔母なる人に「源氏の五十余巻、ひつに入りながら」貰ったのが治安元年（西一〇二一）で、流布年月を計算に入れると、「五十余巻」は長和三年以前に成立していたろう事は確かで、してみると完成後の僅か数年間で亡失し、作者自身増補改作するという事は考えられないから、ここでもやはり前記の場合と同様、亡失した「原紅梅」巻と紅梅巻は、その成立の時間的視点において矛盾が出て来る。そしてこの更級日記の作者の言葉の意味は宇治十帖を別の作者とするにおいても同様であらう。

三 「古本巢守」巻の存在

以上の如き比較の結果、古系図の示す巢守三位の話は、雲隠六帖巢守巻中の三位^一宮の君の話とも、紅梅巻の宮の御方の話とも類似又は一部一致するとし、その源を同じくするというには余りにも根本的な相違があり、従つて古本巢守巻は現行の紅梅巻とは無関連であり、又雲隠六帖巢守巻とも同様別個のもの（事実この巻名は光源氏死後の、道心進む朱雀院の御歌から出ていて、宮の君は中心の人物でなく、巢守巻の名を知る後人がその名に仮託したものである。である事が明らかになると、古本巢守巻はこれら二つの話と関連を持たぬ別個の話であつた事になる。それで問題になるのが、この古本巢守巻の現行源氏物語における位置である。

現行源氏物語には、螢兵部卿宮の子女としては、紅梅巻そして宿木巻に語られる宮の御方以後は全く見られない。その点興味あるのは伝清水実秋筆古系図で、その巢守三位に関する註記には、
「びはひきなり。てならひの巻にあり。」

とあつて、手習巻にあつた事実かと考えられるが、これはこの手習巻が蜻蛉巻に続くところから考へて、蜻蛉式部卿宮の御女と螢兵部卿宮の子女とを混同し、手習巻に引続きその話が記されているものとしてしまったのであらう。池田博士はその理由を明らかにされないが、「螢兵部卿宮と蜻蛉式部卿宮の子女に関して、あるひは混同があるかと思はれる。その混同は、実秋本古系図に、巢守三位の事蹟が手習巻に見えると記してゐる点から想像される」といわれ、この部分の註記の混同を推測しておられる。しかし、この巢守三位の話は堀部正二氏発見の南北朝頃の草子断簡及

び風葉和歌集中の歌四首により、その内容たる巢守三位をめぐる匂宮と薫君との恋の葛藤が一層明らかとなり、そうした三人の物語である点、まず宇治十帖と同じ人間関係にあつた事が知られるが、この女主人公が最終的に宿木巻で猶匂宮の執心を受けている宮の君が螢兵部卿宮から子に當るに對し、孫の世代になる事は注目すべきで、これは優れた著名な作品であればある程、後人の原作への附加がなされる事の肯かれる事、前述の原紅梅巻の非存在古本巢守巻の雲隠六帖、紅梅巻との非関連性等と相俟つて、この巻の後人附加説を強く考えさせる。そしてこれは螢兵部卿宮の孫巢守三位の話が、子に當る宮の御方の話と手法が類似しているという点にも、これを裏返して考える時、感じとられるのではなからうか。つまり紫式部の作たる「五十四巻」という意味での「源氏物語」にプラスアルファの巻が考えられる訳で、その場合後三条朝以後に附加されたものと考えられるのであつて、蜻蛉巻における匂宮に對する薫の復讐心を受け継いで創作したと考えられこの意味からいへば同時代の読者の一人ともいえないことはないしかしいづれにしても正統な源氏物語中にはこの巢守巻は含まれていなかったという事が出来そう、岡一男博士は前述の世代の点と共に、白河院が舞台とされている点から、「寢覚」の影響を見出され、康平年間以後の後人の附加とされて來られた。^{註3}

こうしたこの巻の性格から、一般にはブローバのものとして認められず、流布本にはなかつたのであらう。それは為氏本古系図の後附雜載の

のりのし、すもり、さくら人、ひわりこ、これはつねになし

の記述や、古系図諸本においても、**巢守三位**についての記載のあるものとないう事があるという事実が暗示していると思われる、一般に流布している本、即ち紫式部によって書かれて最初から広く転写されて来た本文を持つ源氏物語にはこの巻がなかったと考えられるのであり、正嘉本古系図の巢守三位等への「以下四人流布本に無し」の註記はこの間の事情を物語っているように思われる。

以上私は源氏物語古系図の発見によって、その存在を明らかにされた**巢守三位**の物語、その巢守三位像と彼女が持つ物語内容との関連性において、或はこの女性の輪廓を伝え、或はその話の前半との全き一致として取り上げられた雲隠六帖巢守巻の宮の君三位の物語と紅梅巻の宮の御方の物語が、決して巢守三位のそれと重なるものではなく、従ってこれを前提として推定された「原紅梅」巻の存在は考えられない事を、各人物との比較によって考え

紹介

窪田・土岐・土屋編

「近代短歌史」 全三巻

第一巻を明治短歌史、第二巻大正短歌史、第三巻昭和短歌史としてそれぞれ独立性を保たせながら、全体として緊密な組織を持つ、近代短歌史たらしめている。章の分

これに付随する二三の問題を考えてみた。

しかし源氏物語の成立に関する諸問題は、周知の如くその泥濘は極めて広く深い。その複雑な問題を生涯通して究明され、古系図の道を拓かれた故池田亀鑑博士に、深い敬謝の意を捧げるもの一人である。

問題の性質上、論旨の徹底の為、拙稿は触れるべくして触れ得なかった点もあり、考の未熟な点が多々ある、御叱正を請う次第である。

註1 「中古日本文学の研究」所収の「桜人」・「狹席」・「巢守」

致

2 日本学土院紀要、昭和二十六年七月所収。その他「源氏物語大成」巻七研究篇にも記述されている。

3 「源氏物語の基礎的研究、五五三頁、並び昭和三十二年十一月早稲田大学国文学会総会講演。

○ 猶雲隠六帖本文は内閣文庫本を以てした。

け方は歌壇史と思潮史との統一点を規準として、ある部分は問題史的ともいえる。近代短歌史は、通史として書かれたものも何通りか出ているが、昭和の現在までに及ぶものとしては渡辺順三氏のものの他多くを聞かない。従っていま通巻約千頁に近い祥密なこの通史をえたことは、近代短歌に関心を寄せる者にとつて大きな喜びであるが、それぞれの時期や

思潮結社に専門の担当筆者を充当して、各章がその方面での道標となりえている点にことにこの企圖の成功を示すものといえよう。各巻末に歌人略伝及び年表を附し、第三巻には総索引があつて周到な編集である。窪田空穂先生はじめ土岐善麿・窪田章一郎・武川忠一・岩田正等計二十二氏が執筆されている。(春秋社刊・A5版・価第一・二巻三九〇円、第三巻五八〇円)